Osaka University Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（十四）
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 92-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58715
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　夜号（総六十一号）平成二十七年十二月　九二―九九頁

新出土資料関係文献提要（十四）

椛島雅弘

本提要は、『中国研究集刊』珠号（総五十九号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十三）」の続編である。今回は、二〇一四年から現時点（二〇一五年十二月）までで、未だ紹介していない原釈文・中文研究書・国内研究書を取り上げる。以下、「原釈文」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の三つに分類して紹介したい。

原釈文

『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』第一冊―第七冊（湖南省博物館、復旦大学出土文獻与古文字研究中心、裘錫圭主編、二〇一四年六月、全て縦組繁体字）

馬王堆漢墓から出土した帛書・簡牘の図版と釈文を収載した書。「整理圖版」（第一・二冊）、「釋文注釋」（第三―六冊）、「原始圖版」（第七冊）で構成されている。「整理圖版」部分には、全ての帛書・簡牘の写真に加え、本来の位置を確認できなかった残片が収録されている。

収録されている資料は以下の通り。『周易経伝』・『喪服図』・『春秋事語』・『戦国縦横家書』・『老子』甲本・『五行』・『九主』・『明君』・『德聖』・『九主図』・『経法』・『十六経』・『称』・『道原』・『老子』乙本・『物則有形図』・『五星占』・『天文気象雑占』・『刑德』甲篇・『刑德』乙篇・『刑德』丙篇・『陰陽五行』甲篇・『陰陽五行』乙篇・『出行占』・『木人占』・『相馬経』・『宅位宅形吉凶図』・『足臂十一脈灸経』・『陰陽十一脈灸経』甲本・『脈法』・『陰陽脈死候』・『五十二病方』・『却穀食気』・『陰陽十一脈灸経』乙本・『導引図』・『養生方』・『房内記』・

『療射工毒方』・『胎産書』・『太一祝図』・『卦象図』・『地形図』・『箭道封域図』・『府宅図』・『居葬図』・『宅位草図』・『十問』・『合陰陽』・『雑禁方』・『天下至道談』・一号墓竹簡遣冊・一号墓竹牌・一号墓籤牌・二号墓竹簡・三号墓竹簡遣冊・三号墓籤牌。

「釋文注釋」部分では、各文献の釈文と注釈を掲げる。「原始圖版」部分には、「整理圖版」に収録されていない図版（帛書の全体図の写真や、部分的に拡大した写真等）に加え、附録として「未命名殘片」「行樂圖殘片」「一號墓T形帛畫」「三號墓帛畫」「車馬儀杖圖」が収録されている。

本書は、かつて文物出版社が出版した『馬王堆漢墓帛書』と比べ、様々な点で優れている。まず、『馬王堆漢墓帛書』第三・第五・第六分冊に収録予定でありながら、現時点で刊行されていない文献が、本書では収録されていることが挙げられる。

また、図版の写真が高解像度のカラー写真であることや、釈文がこれまでの研究成果を基に、今までの誤りを修正し、より精度の高い注釈となっていることも優れた点として挙げられる。

本書が刊行されたことにより、馬王堆関係の文献に関する研究がさらに進展することが期待される。

研究書（中文書）

『楚地戰国簡帛與傳世文獻対讀之研究』（単育辰著、中華書局、二〇一四年五月、全三四八頁、横組繁体字）

主に文字学的観点から、楚簡帛の解釈を行い、また楚簡帛から得られた情報を基に伝世文献を再解釈した書。自身の研究を述べるというよりは、むしろこれまでの諸研究を踏まえ、包括的に概述するという性格が強い。「楚地戰國簡帛的出土及其研究概況」「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀在古文字考釋中的重要性」「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀在先秦典籍研究中的重要性」「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀的幾個重要問題」「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀類舉」の全五章で構成される。

第一章「楚地戰國簡帛的出土及其研究概況」では、楚地で発見された文献を、一九四二年の長沙子弾庫楚帛書から時系列順に紹介し、楚文字の特徴や研究史について概説する。

第二章「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀在古文字考釋中的重要性」では、楚文字を釈読する方法を「小篆」「通假」「甲骨文・金文」「秦簡・漢簡の隷書」「『説文』等に

残存する古文」「韻文」「伝世文献」の計七つ挙げた上で、実際の楚文字解釈は、これらを複合的に用いて行われていることを述べる。また、楚文字を釈読する際、他の楚文字を手がかりにして隷定する例や、伝世文献を手がかりにして隷定する例を多数提示する。

第三章「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀在先秦典籍研究中的重要性」では、まず出土文献によって後人の偽作説が払拭された伝世文献について述べるが、『孫子』『老子』といった比較的有名な文献だけでなく、『呉子』『慎子』といった文献も楚簡帛によって偽作説が払拭されたことを述べる。また、『老子』『論語』『礼記』『大戴礼記』に関連する文献が出土したことによって、それぞれの文献の成立年代やその過程を推測することが可能になったことや、『晏子春秋』『説苑』『新語』といった歴史故事を述べる文献に類似する楚簡帛が存在することを述べる。さらに、伝世文献の判然としない箇所を、楚簡帛から得られた知見に基づいて考察している。

第四章「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀的幾個重要問題」では、楚簡帛及び伝世文献において、文義が判然としない句を解釈し、また「慎独」「六経」といった思想史的に重要なタームについて考察する。

第五章「楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀類擧」では、楚簡帛の中で伝世文献と概ね同一のものや、部分的に一致するものを紹介する。

『先秦思想與出土文獻研究』（竹田健二著、台湾・花木蘭文化出版社、二〇一四年九月、全一五五頁、横組繁体字）

著者が日本で発表した出土文献研究の成果を、それぞれ翻訳して一冊にまとめた書。「氣思想的研究」「郭店楚簡和上博楚簡的研究」「出土竹簡的形制及契口以及劃線的研究」の三篇から構成されている。

第一篇「氣思想的研究」では、古代中国に見える「気」の思想について、出土文献を用いながら考察する。第一章では、『孫子』『孫臏兵法』及び他の兵書に見える「気」の思想に着目する。そして、兵学における「気」は、「望気」という可視的な気と、「士気」という不可視的な気の二系統に大別することができる、とする。その上で、この二系統の気は、『国語』周語や『左伝』に見られる気の思想からそれぞれ発展し、成立したものだと推測する。さらに、『国語』周語で述べられる気の思想は、周王室の史官や楽官が天道にもとづいて職務を行う際、

生まれたものであるとする。

第二章では、上博楚簡『恒先』及び郭店楚簡『老子』『太一生水』に見える気の思想に注目し分析することによって、戦国時代前期以前には、既に「万物は気によって構成されている」という思考が存在していたこと、そして様々なパターンの宇宙生成論が気の思想と結びつけて説かれていたことを論証する。

第三章では、第一章・第二章で明らかになったことをもとに、主に古代中国思想史における気について解説する。

第二篇「郭店楚簡和上博楚簡的研究」では、上博楚簡・郭店楚簡に含まれる文献について考察する。第四章では、郭店楚簡『性自命出』と上博楚簡『性情論』の関係性について、主に形式面から比較検討を行い、両文献が異なる系統に属する二種類のテキストであることを主張する。続く第五章では、両文献を内容面から検討し、その意義を「戦国時代における性説の盛んな議論」や「「天―命―性」を結びつける思考」が少なくとも戦国前期から行われていたことを示す点や、両文献の性説が戦国中期以降の儒家の性説に対して、大きな影響を与えた可能性を示唆する点に求める。

第六章では、上博楚簡『容成氏』に見える身体障害者の福祉政策が、その時の統治者の政治が善政か悪政であるかを示す、一種のバロメーターの役割を果たしていたことを述べる。第七章では、上博楚簡『慎子曰恭儉』を取り上げ、その文献的性格が、後日為政者になるべき人物を対象とする訓戒の書であること、また『慎子曰恭儉』に見える「慎子」が慎到ではないことを論じる。

第三篇「出土竹簡的形制及契口以及劃線的研究」では、形制面から竹簡を考察する。第八章では、上博楚簡の『曹沫之陳』における契口に注目する。契口には、右契口と左契口が存在するが、これまで出土した竹簡の中で、同一竹簡上に右契口と左契口が混在することはないことを論証した上で、この原則を踏まえていない他研究者の排列案に誤りがあることを指摘する。第九章では、上博楚簡『采風曲目』の契口の位置、及び編綫数に注目する。原釈で同じ文献だとされている竹簡のうち、他の竹簡と比べて契口の位置と編綫数が異なる一本が、別文献のものであることを指摘する。

第十章では、清華簡『楚居』や『程寤』等に見える劃線について考察し、竹簡が綴られて冊書が形制された際、その冊書は必ずしも劃線が連続する形にはなっていなかったことを述べる。第十一章では、北京漢簡『老子』及び清華簡『繫年』『金縢』を取り上げる。韓巍氏は、北京漢簡『老子』の情報をもとに「劃線は、竹簡と

して加工する前の竹筒の段階で、螺旋状に記されたものである」という推測を行う。一方何晋氏は、これに対して反論する。この状況を受けて、筆者は何晋氏の論を検証し、その問題点を指摘すると共に、清華簡『繫年』等に見られる劃線からも、韓巍氏の説のような順序で劃線が記されたことを述べる。

本書の第三篇は、契口や劃線に注目しているが、国内外でこのような観点から竹簡研究が行われることは少なく、その点で特徴的である。

研究書（和書）

『出土文獻と秦楚文化』第七号（出土資料と漢字文化研究会編、永鎮文化社、二〇一四年三月、全一二一頁、横組和文）

出土資料と漢字文化研究会が刊行する『出土文獻と秦楚文化』の第七号。本号はすべて出土文献の訳注であり、海老名量介「上博楚簡『霊王遂申』譯注」、宮島和也「清華簡『金縢』譯注」、谷中信一「清華簡『傅説之命』（上）譯注」、名和敏光・宮本徹・小寺敦「清華簡『傅説之命』（中）譯注」、東京大学古文字学読書会「清華簡『傅説之命』（下）譯注」の五編から構成される。

なお、『出土文獻と秦楚文化』のバックナンバーは、出土資料と漢字文化研究会のウェブサイト（http://mcm-www.jwu.ac.jp/~skproject/about/publication/index.html）で公開されている。

『郭店楚簡『五行』と伝世文献』（西信康著、北海道大学出版会、二〇一四年三月、全一八〇頁、縦組和文）

郭店楚簡『五行』・『孟子』・郭店楚簡『性自命出』に関する論考を収録した研究書。「郭店楚簡『五行』研究史と課題」「郭店楚簡『五行』第一段目の思想と構造」「郭店楚簡『五行』第二段目の思想と構造」「郭店楚簡『五行』第三段目の思想と構造」「『孟子』万章下篇「金聲而玉振之」考」「『孟子』に見える告子の仁内義外説」「郭店楚簡『性自命出』の人性論とその周辺」の全七章で構成され、各章ともそれぞれ文献に対する従来の関心や視点を批判し、新たな解釈を試みた点で特徴的である。

第一章「郭店楚簡『五行』研究史と課題」では、郭店楚簡『五行』の研究史と課題について言及する。具体的

には、《経》のみの郭店『五行』と、《経》に加えて《説》を伴う馬王堆『五行』との関係性に関する池田知久氏と浅野裕一氏の学説について、それぞれ著者の見解を述べる。そして、新たに《説》が『五行』に加えられる思想的要請が何だったのか明らかにするため、馬王堆『五行』の《説》を参考にして郭店『五行』の解釈を行うのではなく、まず郭店『五行』を独立した文献として考察すべきことを主張する。また、解釈の手段として、郭店『五行』の竹簡に見える墨節記号に着目して本文を検討することを提示する。

第二章・第三章・第四章では、墨節記号を『五行』の思想的特徴を反映したものと規定した上で、『五行』を三つの段落に分け、それぞれ構造的特徴及び思想的特徴について考察する。その結果、第一段目と第二段目にはそれぞれ独自の思想的主題が存在する一方で、第三段目には構造的にも思想的にもまとまりに欠けることを指摘する。

第五章「『孟子』万章下篇「金聲而玉振之」考」では、従来有力な説が存在しなかった『孟子』尽心篇上「集大成也者、金聲而玉振之也」の解釈について、同じ文章が見える馬王堆『五行』や、類似句が存在する『性自命出』等を参考にして解釈を試みる。そして、「金聲」「玉」が単なる音楽用語ではなく、人物の徳性を聴覚的・視覚的に比喩する語であるとした上で、「金聲而玉振之」を「金のように（美しい）声を発し、玉のようにおのずから、（美しい音を）振るう」と解釈する。

第六章「『孟子』に見える告子の仁内義外説」では、郭店楚簡『六徳』・『語叢一』・『管子』戎篇・『墨子』経説篇を参考にして、『孟子』に見える告子の義外説を再考する。著者によれば、告子の義外説は、「天」といった既に一定の客観性が保証された権威的概念を持ち出さず、日常的な色に対する認識作用と、年長者に対する道徳的行為とを比喩として用い、その独自の「狂挙」的な説明方式（内外区分が不均整で、きれいな対称性が確保されていない説明方式のこと）によって、「義」の客観性を論証する。そして、ここに告子の義外説の思想的意義が見いだされる、という。

第七章「郭店楚簡『性自命出』の人性論とその周辺」では、『性自命出』に見える「性」「心」「物」や、「善」「不善」及び「物」「勢」といった主要概念について、これらの概念をめぐる比喩表現や文章構造を改めて検討し、その意味内容を明らかにする。また、『性自命出』冒頭の一文を全体の思想に位置付けて把握することで、『性自命出』の人性論の思想的特徴を、その周辺の諸思

想との関連において明らかにした。著者によれば、『性自命出』の人性論は、人間を支配する必然的な因果法則に対する自覚の上に、人間の心の自由の領域に価値を認め、規範の根源と人間性とに関する思索を深めるものである。

『漢簡語彙　中国古代木簡辞典』（京都大学人文科学研究所簡牘研究班編、岩波書店、二〇一五年三月、全五九〇頁、縦組和文）

簡牘・漢簡の語彙を収録した辞典。京都大学人文科学研究所で二〇〇五年から二〇〇九年まで行われた共同研究「漢簡語彙の研究」及び二〇一〇年から二〇一四年まで行われた共同研究「漢簡語彙辞典の出版」の成果である。

見出しとして採用された語彙は、親字約一六〇〇字、熟語約五四〇〇語の合計約七〇〇〇である。居延漢簡（新・旧を含む）に見える語彙を主として取り上げ、補足的に肩水金関漢簡、スタイン発見の敦煌簡、敦煌馬圈湾漢簡、敦煌懸泉置出土簡、額済納漢簡の語彙も一部含む。このように、対象となる簡牘・漢簡は、西北辺境から出土したものであり、銀雀山漢墓竹簡や張家山漢墓竹簡等の漢代「竹簡」は含まれない。（ただし、張家山漢墓竹簡等に含まれる律令関係の文章は、用例として掲げられることがある）

見出しは、その見出し字、読み、写真を掲げたのち、意味と用例が記される。用例については、『史記』『漢書』等の典籍と漢簡の用例を両方掲げている。

本辞典は、特に漢代の軍事・行政について研究する際、大量の漢簡の中から、用例を手軽に調べることができ、その点で大変有用である。

『漢簡語彙考証』（富谷至編、岩波書店、二〇一五年三月、全四七三頁、縦組和文）

前掲『漢簡語彙　中国古代木簡辞典』（以下、『漢簡語彙』と略記）の姉妹編にあたる書であり、十年にわたって行われた共同研究の成果である。「Ⅰ漢簡概説」「Ⅱ事項考証」「Ⅲ語彙考証」の三部から構成される。

「Ⅰ漢簡概説」では、簡牘・木簡に関して基礎的な解説を行う。また、西北辺境で出土した簡牘・木簡について概説する。

「Ⅱ事項考証」では、漢簡が使用された時代の行政・

軍事施設の実態、制度、武器、時制について伝世文献と漢簡の情報を参照しつつ解説を行う。具体的には、訴訟手続き、弓・弩・矢、農官の統属関係、漢代辺境における時間の区分の仕方及び各時刻の呼び名について述べる。またこれらに加え、王莽期の木簡の特徴を示す。

「Ⅲ語彙考証」では、『漢簡語彙』に収録されている語彙のうち、上部に＊印を附すものを取り上げ、より詳細に解説する。例えば、「角」については、『漢簡語彙』に四つの意味が掲げられているが、その四つ目は「弓弩の力数をはかる具か」という語義である。本書では、この根拠となる資料を提示すると共に、未詳の部分が存在していて、あくまで暫定的に挙げたため「～か」としていることを述べる。その他、多数の語について補足を行っており、『漢簡語彙』と併せて読むことを想定した書である。

『馬王堆出土文献訳注叢書　胎産書・雑禁方・天下至道談・合陰陽方・十問』（大形徹著、東方書店、二〇一五年三月、縦組和文）

馬王堆出土文献訳注叢書シリーズの一つ。馬王堆文献の中でも特に医学に関わる文献の訳注書であり、具体的には『胎産書』『雑禁方』『天下至道談』『合陰陽方』『十問』を取り上げる。本書は、「解説」と訳注の二部に分けて掲載する。

「解説」では、各文献の概説を行う。例えば『胎産書』については、出土状況・儒書に見える関連記述・内容が重複する文献（『逐月養胎方』『諸病源候論』）との比較等を行う。また、『胎産書』と同じ帛に記されている「禹蔵図」「人字図」についても解説する。

また『十問』については、登場する人物について解説を加え、『天下至道談』『合陰陽方』と同内容が記される箇所を表にまとめ、考察を行っている。

なお、本書の末尾には、本書の釈読と前掲『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』の釈読の対照表が附されており、両書で隷定が異なる文字に傍線が引かれている。